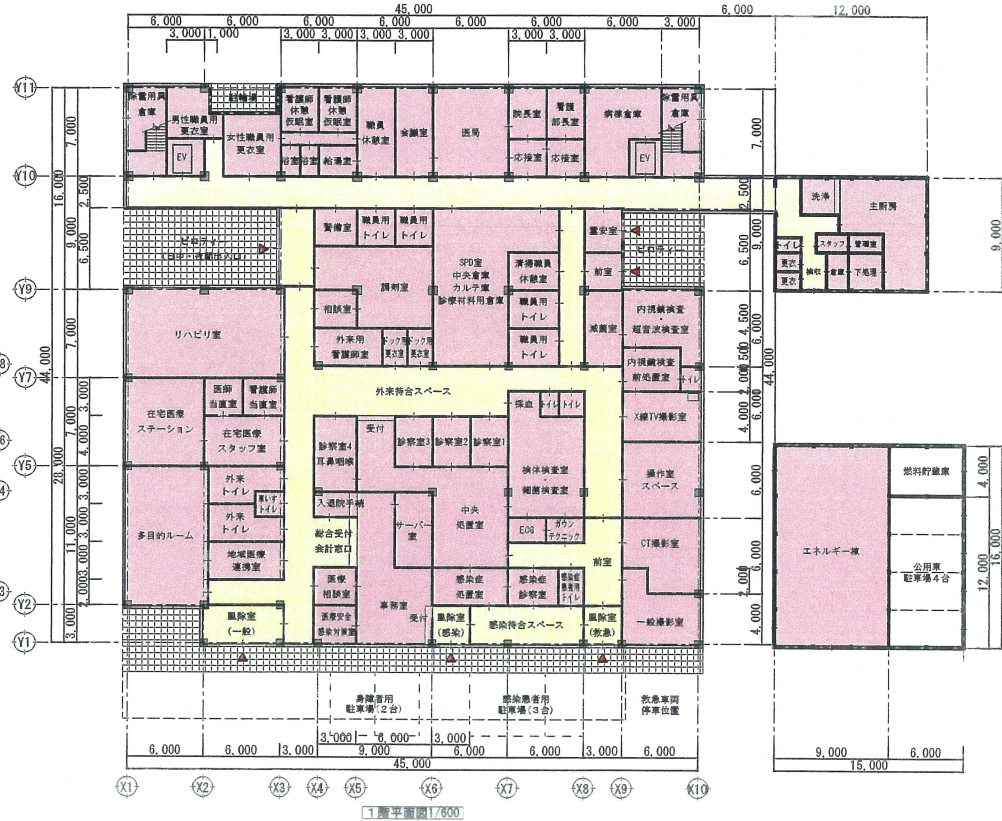
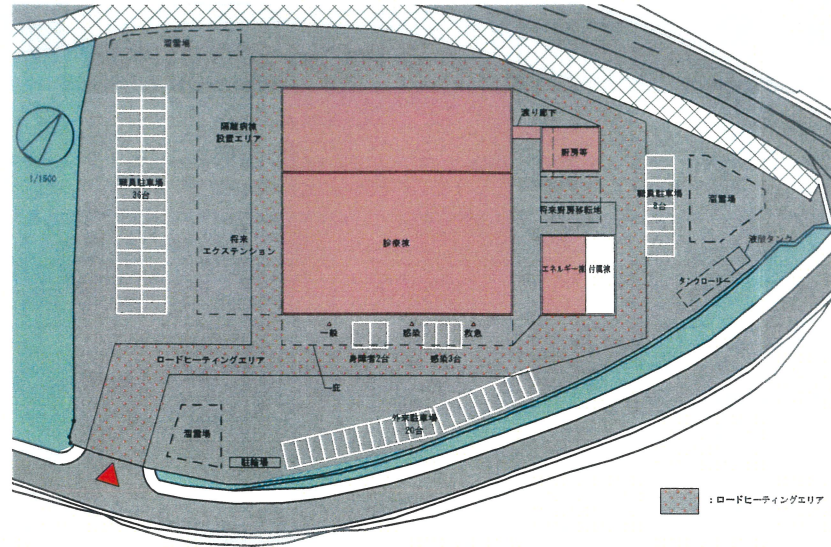
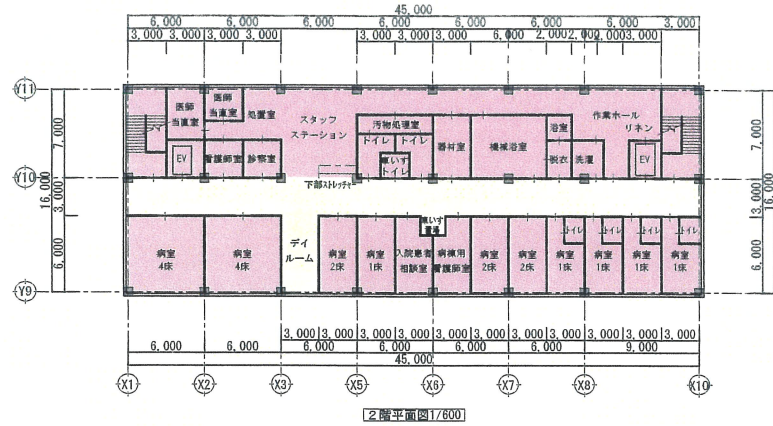


# 1 プロジェクト方針

## 「私たちの取り組み」

新しい(仮称)宮下診療所は、地域に寄り添った診療所であることが望ましいと考えます。昨今の過大な、あるいは、過剰な施設ではなく、これから半世紀の間、町民の命を「当たり前」に守る「あるべき形」で守る医療機関として、十分に機能を発揮できる施設が好ましいと考えます。建物の姿も、地域が歴史的に守ってきた、安心できるデザインとし、決して流行に乗った派手なものを目指しません。永く地域に愛され、町民に愛される施設を目指します。但し、新たな価値観、ニーズに対して柔軟性がある施設であることは、可変性のある施設として十分に心がけます。



面積表

建物	構造	階数	面積 m <sup>2</sup>	小計 m <sup>2</sup>	坪面積
診療棟	S造	2/0	2,565	2,565	775.9
渡廊下	LS造	1/0	15		
厨房棟	LS造	1/0	108	267	80.8
エネルギー棟	LS造	1/0	144		
			※2,832m <sup>2</sup>		856.7坪

(2.700×1.05=2.835m<sup>2</sup>>※2.832m<sup>2</sup> OK)

## (1) 地域の人々の安全・安心支える施設の提案

新病院の基本理念である「心ある医療」の実現に向け、建築という環境面から十分に貢献するものであることをお誓い申し上げます。

高齢化と人口減少が続く中、新たな医療、オンライン診療、訪問診療、訪問看護、訪問リハビリ、へき地医療の最前線基地としての機能が地域に見える事(見える化)に重点を置いた施設とします。

将来的なエクステンションを可能とした、効率的な平面計画と、ユニバーサルデザインを軸に、安全な施設を目指します。

## (2) 奥会津地域の特性と調和し、特別豪雪地帯を考慮した施設の提案

診療所屋根は、コンクリートスラブによる陸屋根とし、側溝、縦樋へは熱戦ヒータを設置します。また、エントランス庇及び、各庇については、落雪防止のためヒータを設置します。駐車場は、各ゾーンごとにまとまった溜雪場を設け、一方向への除雪作業を可能にします。又、除雪作業効率の面からも、植栽帯・車止め等のない、アスファルト敷設のみとします。但し、緊急車両(救急車両・消防車両等)の乗り入れを考慮し、建物外周は、ロードヒーティングを設置します。

## (3) 災害や感染症に強い施設の提案

**災害に強い施設**：建屋は、構造体を鉄骨造とし、分類をⅡ類とします。また建築非構造部材および、建築設備においても、それぞれ分類をA類、甲種とします。災害時の避難住民に対し、建屋の部分開放だけでなく、外部住民に対しても、必要な電源設備、下水を利用したマンホールトイレを用意します。通常の電源が消失した時も非常用発電装置と連動して、受水槽からの給水を継続的に行うシステムを採用します。建屋地下ピットの一部を遊水地利用し、緊急時にはポンプアップして雑用水として利用できるようにします。地域連携部門の多目的室やリハビリ室は緊急時に外部からの直接入室を可能とし、リハビリに隣接した外部ピロティーは、トリアージが行える環境を整えます。

**感染症に強い施設**：今後も発生するであろう感染症に対し、それぞれの状況で来院される患者様が安心して受診できる環境を実現します。一般の疾患で来院される方、緊急車両で来院される方であっても、感染症の疑いのある患者様とは明確に動線分離された受診が出来る環境とします。また感染症の疑いのある方は、当然自身での来院、緊急車両での来院も動線分離された環境での受診となります。一般撮影、CT撮影においても動線分離を徹底します。発熱外来来院者のための駐車スペースを近接して配置します。パンデミック発生時の利用が予想される、地域連携部門の多目的室や、リハビリ室は陰圧管理できるように整備します。また隣接して、さらなる大規模な感染症が発生した場合の隔離病棟の設置場所を予め想定しておきます。病棟においても、個室及び2床室は陰圧管理を可能とします。

## (4) 県産材の積極的な活用やエネルギー性能が高く持続可能性に優れた施設の提案

**県産材の活用**：主要構造部以外の、構造的な負担の少ない部分や、外來の内壁に県産材を用い、適材適所を重視した利用を心がけます。外壁への使用は、耐久性やメンテナンス性を考慮し行いません。**エネルギー性能が高く持続可能性に優れた施設**：特殊な設備機器は使用せず、メンテナンスや将来の用途変更が容易な設備計画とします。広い部屋については、通常の空調機器のほか、床からの送風を加え、寒冷地特有の冬のヒヤッとした感覚を低減し、患者さん、働き手に優しい計画とします。夏は床からの送風により、適正な高さの冷房層を作る事で、エネルギー効率を高めます。

## (5) 将来的な施設の可変性に関する提案

環境面での変化が比較的少ない病棟及び、一部の事務部門は、鉄骨造の均質な柱割りで空間を構成します。外來棟を軸に空間的にアクティブなエリアは、平屋建て鉄骨造無筋かいラーメン構造の採用で、均質なスパン割りを採用せず、あくまでも室の機能・特性に合わせた自由な柱割りの採用と、大スパンとする事で、今後の各ゾーンの要求の変化に対し、増改修のしやすさを可能としました。また階高を十分に確保することで、設備の伸延に対しても配慮します。機械室はエネルギー棟に集約し、平屋建て軽量鉄骨の耐震構造とします。地下ピット(トレンチカルバート)は本体に接続され、エネルギーを供給します。病院の改修で難しい施設の上に厨房施設があります。今回、厨房を軽量鉄骨の耐震構造とし、エネルギー棟と合わせ別棟とします。軽量鉄骨造の単価は安価であるため、工事費削減に貢献します。改修においては、他所への影響を最小化し、また20年後の整備は、隣接して新たな厨房を建設することで、新厨房の完成へ引越越しと厨房作業への影響を最小化しました。

## (6) その他の提案

中央処置室を中心に各ゾーンが有機的に結ばれる施設とします。一般患者、救急患者、感染症患者の居場所が明快に区分され、処置に絡む各種検査も多くの移動無しで受診できる環境を実現します。このことはスタッフも分散せず、集約できる事から、より密度の高いケアが可能となります。高齢者が増加する中で、明快な動線と移動距離短縮は重要です。また、医療施設での各種事故データを十分に把握した中で、今後、作業を進めてまいりたいと考えます。

